原因・理由を表す中国語 “ 是…的 ” 構文について
―意味の形成と構文の制約を中心に―

劉　　陽

要旨

本稿は事象の原因・理由を表す中国語 “是…的” 構文（“是…的” 原因構文）を考察する。従来の研究は “是…的” 原因構文の記述にとどまり、構文的意味の形成と構文の制約を論じる研究は少ない。本稿は構文文法の視点から、“是…的” 分裂構文および “是…的” コピュラ構文という別の種類の “是…的” 構文との関連性に注目し、“是…的” 原因構文はその2種類の “是…的” 構文から派生したものであり、原因・理由を表すという意味と構文の使用上の制約は “是…的” 分裂構文または “是…的” コピュラ構文の文法的性質に基づいて解釈することができることを主張する。

【キーワード：中国語 / “是…的” 構文 / 原因・理由 / 分裂構文 / コピュラ構文】

1.　はじめに

中国語 “是…的” 構文とは、“是” と文末に位置する “的” という２つの固有の構成素をもつ構文である。“是…的” 構文には主に２つの下位分類が存在し、それは (1) のような対比的焦点を示す分裂構文タイプ（“是…的” 分裂構文）と（2）が示している主語の性質を説明するコピュラ構文タイプ（“是…的” コピュラ構文）である。

(1)　小明是**昨天**去学校的。（小明は**昨日**学校に行ったのだ。）[1]

（対比的焦点は太字で示される）

(2)　我是学日语的。（私は日本語を勉強している人だ。）

本稿で注目するのは、上記の２種類のタイプに属さず、事象の原因・理由を表す “是…的” 構文である。以下、“是…的” 原因構文と呼ぶことにする。その例文は（3）と（4）で示される。“是…的” 原因構文で示されている内容は下線でマークする。

(3)　她十分平静地说、前两年死掉了、<u>是中风死的</u>……（（旦那が）二年前に死んじゃって、<u>卒中で死んだんだ</u>と彼女は静かに語った。）（董2016: 189）

[1] 本稿で出典が明示されていない例文は筆者によるものである。また、すべての例文の日本語訳も筆者が訳したものである。

（4）　……但是天天想着回重庆、……尤其是我、好像是离不开自己生活过的故土的。（でも毎日重慶に帰りたいと思っている…特に私は（そう思っていて）、まるで自分が暮らしていた故郷を離れられないみたいなんだ。）（BCC）

（3）における“是…的”原因構文は旦那が卒中で死んでしまったという事象を述べているのみならず、前文の「旦那が二年前に死んだ」という事象の原因も表している。同様に、（4）における“是…的”原因構文は、重慶に帰りたいのは故郷を離れられない気持ちがあるからであるという因果関係を説明している。

“是…的”原因構文に対する基本的な記述を行った研究は少なくない（例えば李・安・張（1998）、劉・潘・故（2004）など）が、以下の２点に関する考察はまだ不十分である。まず、“是…的”原因構文には接続詞の“因为”といった明確に原因・理由を表す要素が含まれていないにもかかわらず、なぜ原因・理由を表すことができるかが不明である。また（5）のように、“是…的”原因構文は原因・理由の説明に用いられないケースも数多く存在するが、なぜこのような制限があるかも解明されていない。

（5）　你怎么没开车？（どうして車で来てないの。）
　　＊——我的车是坏的。（車が壊れたんだ。）

本稿の目的は“是…的”原因構文の構文的意味の形成メカニズムと構文の制約を明らかにすることである。そのため、本稿は構文文法（Goldberg 1995, 2006）の視点から、“是…的”原因構文を慣習化された形式と意味機能のペアとしてとらえ、さらに他の２種類の“是…的”構文との関係に注目して考察を行う。本稿の構成としては、第２節では“是…的”原因構文に関する先行研究を紹介する。そして、第３節では別タイプの“是…的”構文の性質を概説し、“是…的”原因構文の意味形成との関連性を説明する。第４節は“是…的”原因構文の使用に見られる制約を分析する。

2.　先行研究

“是…的”原因構文に言及した研究は李・安・張（1998）、杉村（1999）、劉・潘・故（2004）、Paul and Whitman（2008）、謝（2012）、Shyu（2013）、董（2016）、楊（2020）などがあるが、その多くは単なる意味機能の記述にとどまっている。本節では、“是…的”原因構文の構文的意味の成り立ちおよび制約も説明している杉村（1999）と董（2016）の研究を紹介し、それぞれの問題点を述べる。

2.1　杉村（1999）

杉村（1999）は“是…的”原因構文を“事件原因解说型‘是…的’句（事件原因解説型‘是…的’構文）”と名付け、ある事象が起こった後に、その発生の原因を解説し、どのような事象であるかを説明するための構文と定義している。

また、起因事象を表す “是…的” 原因構文は通常、結果事象を表す文（ここでは「先行文」と呼ばれる）の後に現れるという特徴があると考えられる。これは時間的にも文脈的にも結果事象の先に生じるという中国語の一般的な原因構文の位置と対照的である。

杉村によると、“是…的” 原因構文の意味はコピュラ構文の性質に関係している。中国語において、指示的要素がコピュラに先行し、述語的要素がコピュラに後接するコピュラ構文は分類を表している（述語的要素はカテゴリーを表し、指示的要素はそのカテゴリーに分類された対象を表す）（朱 1978: 105）[2]。それと同様に、“是…的” 原因構文の先行文は具体的で確定した結果事象を表し、指示的要素に相当するので、「先行文—“是…的” 原因構文」という構造の意味のスキーマは「指示的要素—述語的要素」という形になり、分類を表しているコピュラ構文と見なすことができる。ここで、“是…的” 原因構文はコピュラ構文と類似した統語構造を有するので、分類というコピュラ構文の意味を借用して先行文の事象を分類し、その事象の一側面を際立たせる[3]。さらに、“是…的” 原因構文は事象の原因・理由という側面を際立たせる機能をもっているので、その結果先行文との因果関係を示していることになる。

杉村の解釈は要するに、“是…的” 原因構文の表す事象自体がすでに先行文の事象の起因に当たっており、分類を表すという構文的意味によって先行文と関係づけられ、両者の間の因果関係を明示できるようになるということである。杉村（1999）の問題点は３つある。まず、指示性は名詞（的要素）の素性であり、文の事象の具体性とは異質なものであるため、先行文を指示的要素と見なすのには無理がある。また、“是…的” 原因構文がなぜ述語的要素に当たるのかを説明していない。さらに、杉村は “是…的” 原因構文の構文的意味と「先行文—“是…的” 原因構文」という構造の意味を混同している。彼の解釈によると、分類というコピュラ構文的な意味は「先行文—“是…的” 原因構文」という構造に見られるものであり、“是…的” 原因構文自身の意味ではないはずであるが、彼はその意味を “是…的” 原因構文の意味として扱い、原因・理由を表す意味の形成メカニズムの説明に用いている。

“是…的” 原因構文の使用制限については、杉村は “是…的” 原因構文がまだ確定されていない起因事象を表すことができないと指摘している。例えば、（6b）の “是…的” 原因構文が非文になる理由は、祖母がご飯を持ってきたという事象が文の中の人物（玉環）の推測に過ぎず、まだ現実として確定されていないからである。

---

[2] 例えば、“小王是第一个跳下水去的（王さんは最初に水に飛び込んだ人だ）” という文では、コピュラ前の要素の “小王（王さん）” は指示的要素であり、分類の対象となる。それに対して、“第一个跳下水去的（最初に水に飛び込んだ人）” は述語的要素であり、カテゴリーを表している。全文は “小王” という対象を “第一个跳下水去的” というカテゴリーに分類しているという意味を表す。

[3] 杉村の解釈で言えば、ある対象を分類することはその事象の一側面を記述することである。ここで指摘しているのは、分類は分類される対象のもっている様々な性質の中の一部を分類基準として行われるので、対象をその基準によって分類すれば、逆に基準の元となる性質を強調することになるということであろう。

(6)　a.　……高粱地里传来一阵悉悉嗦嗦的响声。玉环的心里一乐、准是奶奶送饭来了。(…モロコシ畑からこそこそした音が伝わってきた。玉環（人名）はにこっとして、絶対おばあちゃんがご飯を届けてきた（と思った）。)

b. *……准是奶奶送饭来的。(杉村1999: 57)

しかし、反例は簡単に挙げられる。まず、(7) が示しているように、料理がおいしくなかった理由としての「研修中の人が作った」という事象は同じく発話者の推測に過ぎない（“肯定”（確かに、疑いなく）という推測を示すモダリティ要素があるため)、ここでは “是…的” 原因構文の使用が可能である。また、(8) のように、車が壊れたという起因事象が確かなことであっても、“是…的” 原因構文によって示されることができず、代わりに一般動詞文が用いられる。したがって、起因事象が確定したかどうかは “是…的” 原因構文の制約にはならない。

(7)　今天的菜真难吃、肯定是实习生做的。(今日の料理は本当にまずくて、絶対研修中の人が作ったのだ。)

(8)　你怎么没开车？（どうして車で来ていないの）

a. *——我的车是坏的。(車が壊れたのだ。)

b.　——我的车坏了。(車が壊れた。)

2.2　董（2016）

董（2016）は “是…的” 原因構文を「事態の原因を補足説明するタイプ」と「結果の原因を補足するタイプ」に分けている。２タイプの例文はそれぞれ（9）と（10）になる。

(9)　明天是星期天、你到我家吃中饭吧、……是我妈叫我特邀你的。(明日は日曜日だ、うちに来てご飯を食べよう…母に誘ってって言われたんだ（母が私に君を特別に招かせたんだ)。)（杉村1999: 57）

(10)　……有个妇女晕倒了、是饿晕的。(…一人の女性が倒れた、餓えて倒れたんだ。)（董 2016: 192）

事態の原因を補足説明するタイプは、前文で述べられた事態の経緯を補足することによって、その事態の原因を明らかにする。例えば、(9) においては、最初の２文は聞き手を家に招待しようとする事象を表し、“是…的” 原因構文は発話者が母の指示で聞き手に声をかけたという招待に関する情報を補足している。その結果、聞き手は発話者が母に言われたので自分を誘ったという招待の理由を知ることになる。一方、結果の原因を補足するタイプは、ある結果事象に対して、その結果をもたらした原因を補足説明する構文である。(10) で説明すると、先行文は女性が倒れたという決まった結果事象を表し、その直後に現れる “是…的” 原因構文はその事象の原因が餓えていることであるということを説明していると考えられる。

“是…的” 原因構文（特に事態の原因を補足説明するタイプ）が用いられないケースについては、董は先行文の表す結果事象と “是…的” 原因構文の表す起因事象が同じ事象の場合のみ、“是…的” 原因構文の使用が許容されると述べている。彼女は次の２文でその詳細を説明している。(11) における「別れる」という結果事象と「彼に振られる」という起因事象は同一事象であるので、“是…的” 原因構文による起因事象の提示が可能である。それに対して、(12) における「私のことを愛さない」という起因事象は前の「別れる」という結果事象と同一事象と考えにくいため、“是…的” 構文によって示すことができない。

(11)　分了、是他不要我的。（別れた。彼に振られたんだ（彼が私のことを必要としないんだ）。）（董2016: 191）

(12) * 分了、是他不爱我的。（別れた。彼がもう私のことを愛さないんだ。）（董2016: 191）

ところで、董は同一事象か否かの判断基準を提示していない。また、実際に、起因事象と結果事象が同一事象と考えられなかったり、判別しにくかったりしても、起因事象が “是…的” 原因構文を用いた例は多数存在する。次の例文を見てみよう。

(13)　人家劝我在清晨为她奏乐；他们说那是会打动她的心的。（みんなは夜明けの時に彼女に音楽を奏でることを勧めてくる。それは彼女の心を打てるのだという。）（BCC）

(14)　她更舍不得请不速之客入席。这帮人明明就是来混饭的！（彼女は押しかけの客のほうが招きたくない。こんな奴らは明らかに乞食しに来ただけなんだ！）（CCL）

(13) と (14) が示しているように、それらの “是…的” 原因構文は意味的に主語の物事（「夜明けの時に彼女に音楽を奏でること」）や人（「こんな奴ら」）の特性を表している。それは先行文が表す動作者の行動や思惑と全く異質な事象であるため、両者が同じ事象に属しているとは言い難い。にもかかわらず、２つの事象には因果関係が見られ、“是…的” 原因構文は起因事象を表している。したがって、先行文と “是…的” 原因構文が表す事象の同一性は、後者の使用上の制約として不十分である。

さらに、董は (12) を非文と判断しているが、筆者は適格な表現であると考える。

2.3　まとめ

杉村（1999）と董（2016）は意味形成メカニズムおよび構文の制約の解明に至っていない。特に注目したいのは、両者を含めたこれまでの研究者が “是…的” 原因構文を考察する際に、別の “是…的” 構文との関係にほぼ言及していない点である。本稿は、構文文法に基づき、“是…的” 原因構文が他の “是…的” 構文と密接な関係にあるという立場を取り、“是…的” 原因構文の意味形成と制約を論じていく。

3.　２種類の “是…的” 構文と “是…的” 原因構文の意味

“是…的” 構文は単一の構文ではなく、複数の構文をまとめた総称である。“是…的” 構文の種類について研究者は様々な分類を提案しているが（例えば Paris 1979、杉村1999、劉・潘・故2004、Paul and Whitman 2008、森2011、謝2012、屠2013、王2018など）、機能的視点から見れば、対比的焦点を示す “是…的” 分裂構文とコピュラ構文のようなふるまいをする “是…的” コピュラ構文に二分することができる。本節では２種類の “是…的” 構文の文法的性質を概説し、“是…的” 原因構文との関連性を示す。

3.1　“是…的” 分裂構文

“是…的” 分裂構文とは、“是” と文末に位置する “的” を含み、英語の *it* 分裂構文のように、文における特定の要素を対比的焦点として示す構文である。以下はその例である。

（15）　a.　他是**上个月**来日本的。（彼は**先月に**日本に来たのだ。）
　　b.　我是**在日本**做研究的。（私は**日本で**研究をしているのだ。）
　　c.　我们是**用筷子**吃饭的。（私たちは**お箸で**ご飯を食べるのだ。）
　　d.　小明是**为了旅游**（才）买车的。（小明は**旅行のために**車を購入したのだ。）
（16）　a.　蛋糕是**小明**做的。（ケーキは**小明が**作ったのだ。）
　　b.　是**老师**通知大家的。（**先生が**皆に知らせたのだ。）

“是…的” 分裂構文は特殊な焦点構造をしている。中国語の文の焦点は一般に述語、目的語または時間の長さや回数を表す語といった述語の後に現れる要素に置かれているが（LaPolla 1995: 299）、“是…的” 分裂構文の焦点はすべて述語に先行する要素にある。具体的には、（15）のように、時間や、場所、工具、目的などを表す前置詞句、副詞（副詞的な時間詞も含める）、従属節といった連用修飾語（中国語学の用語で言えば “状语”）は文の焦点として選ばれる。また、（16）が示しているように、動作主または構文の主語も焦点になりうる。特に焦点が主語に置かれる場合は、“是” が文の最初に位置することもある（郭 2003）。

さらに注目したいのは、“是…的” 分裂構文の焦点には対比的意味が付加されることである。Li（2008）は Kiss（1998）および Xu（2004）を参考にし、この対比的意味を「網羅性（exhaustiveness）」と「排他性（exclusiveness）」という２つの意味特徴に分解している。Li によると、網羅性とは、ある要素が命題を真にする集合におけるすべての要素である場合に成立する意味特徴である。一方、排他性とは、ある要素が命題を真にする集合における唯一の要素の場合に成立する意味特徴である。

例を挙げると、例文（17）では、文の焦点となるのは “日本人（日本人）” という要素である。そして、対比的意味によってこの “是…的” 分裂構文から焦点に関連する２つの意味が読み取れる。１つは「このビルの建設者は日本人のみである」という網羅性の意味であり、もう１つは「このビルの建設者は他の誰でもなく、日本人だ」という排他性の意味である。

（17）　这栋楼是**日本人**建的。（このビルは**日本人が**建てたのだ。）

3.2　“是…的” コピュラ構文

“是…的” コピュラ構文はコピュラの “是” を主要動詞とし、“是” およびその両側に位置する要素から構成される。以下はその例文である。

（18）　我十二岁那年的假期是忧伤的。（私の十二歳の時のバカンスは憂鬱だった（憂鬱なものだ）。）（BCC）

（19）　……我不会不顾罪孽去爱讲经师、这点是肯定的。（…私は罪を顧みず説教者を愛したりなんかしない。これは確実だ（確実なことだ）。）（BCC）

（20）　……那是平常的人都可以喝的。（それは普通の人でも飲める（飲めるものだ）。）（BCC）

（21）　……而且我虽然不敢自命对美国十分了解、至少有一件事是美国人全都同意的。（しかも自分はアメリカのことをよくわかっていると思わないが、少なくともあることにはアメリカ人全員が同意している（同意していることだ）。）（BCC）

“是” に後接する要素は “的” に導かれる “的” 節に限定される。この “的” 節は形容詞や動詞（句）からなるが、名詞句のような統語的・意味的な特徴をもっており、名詞化節とも考えられる（Paris 1979、朱1982、Zhan and Sun 2013など）。また、“的” 節は関係節にも類似している（Cheng 2008、Li 2008）。具体的に、“的” 節にはその中の述語の必要な項に相当する要素が少なくとも１つ削除されなければならないという関係節のような特徴がある。削除される要素の種類は述語要素の主語や目的語、具格要素[4]に限定される。例えば、（20）には動詞の “喝（飲む）” の目的語が削除されており、もしそれをあえて “的” 節に入れれば、（22b）のように非文になる。

（22）　a.　那是平常的人都可以喝∅的。
　　b. * 那是平常的人都可以喝东西的。

---

[4] 具格要素が必要な項として削除されるケースの例文は（i）で示される。中国語の具格要素は一部の前置詞的な性質をもつ動詞（例えば “用（使う）”、“拿（取る）” など）でマークされ、通常述語にとって非必要な項であるが、擬人的な用法でなくても（ii）のようにしばしば主語に相当する位置に繰り上げられ、主語のようなふるまいをする。この場合は（iii）のように本来の主語が具格要素と同じ節に生起できなくなり、必要な項の地位を失い、具格要素が代わりに述語の必要な項になる。これは（i）のような一見必要な項の削除のない “的” 節が存在する理由である（（i）では、具格要素と主語は同じ文に現れても、前者は主節に生起し、後者は “的” 節に生起し、同じ節に生起していないので制約違反にはならない）。つまり、実質的に必要な項としての具格要素が削除されているからである。

（i）　那把刀是小明切肉的。（あのナイフは小明が肉を切るためのものである（小明が肉を切るものである）。）

（ii）　a.　斧头砍断了树。（斧で木を切った（* 斧が木を切った）。）
　　b.　树被斧头砍断了。（木は斧で切られた（* 木は斧に切られた）。）

（iii）　a. * 我斧头砍断了树。（私が斧で木を切った（* 私が斧が木を切られた）。）
　　b. * 树被我斧头砍断了。（木は私に斧で切られた（* 木は私に斧に切られた）。）

さらに、すでに先行研究に指摘されているように、“的” 節は名詞句と同様にモノを表しているが、表しているのは削除された項が指し示すものである。(23) が示しているように、この “的” 節は動作ではなく、「普通の人でも飲めるもの」というモノを表している。しかも “的” の後に削除された項を補完すれば、完全に関係節になる。したがって、“的” 節は主要部なし関係節（headless relative clause）（Li 2008）とも呼ばれる。

(23)　平常的人都可以喝的 ＝ 平常的人都可以喝的东西（普通の人でも飲めるもの）

“的” 節の意味がわかれば、“是…的” コピュラ構文は確かにコピュラ構文であることがわかる。つまり、それは主語の性質を “的” 節が表している内容で説明する措定コピュラ構文（predicational copular construction、措定文）と考えられる[5]。“的” 節の主要部（“的” の後に現れる名詞句）を補完するように、“是…的” コピュラ構文の最後に “的” 節に削除された項を加えれば、“是…的” コピュラ構文は意味の変動なしで完全に典型的な措定文になる。(24) はその具体例である。

(24)　那是平常的人都可以喝的。 ＝ 那是平常的人都可以喝的东西。（それは普通の人でも飲めるものだ。）

3.3　“是…的” 原因構文の意味形成

“是…的” 原因構文はなぜ事象の原因・理由を表すことができるだろう。実際に、“是…的” 原因構文は統語構造も意味機能も上記の２種類の典型的な “是…的” 構文と変わらず、原因・理由を表す構文であると同時に、分裂構文またはコピュラ構文と解釈することも可能である。以下の例文を見てみよう。

(25)　一定是对的、我是按照步骤做的。（（この作り方は）絶対正しい。私は手順通りに作ったんだ。）（BBC）
(26)　你最好小心点、昨天的案子是一个惯犯干的。（気を付けたほうがいいよ、昨日の事件は常習犯がやったんだ。）
(27)　……但是这种特殊的现象并不会使群众改变、群众是不能改变的。（…しかしこの特殊な現象は民衆を変えないだろう、民衆は変えられないんだ。）（BCC）
(28)　我们应该去南边、那里是能过好日子的。（我々は南に行くべきだ。あそこではいい生活ができるんだ。）

(25) と (26) の “是…的” 構文は、その直前の文が表す事象の原因・理由を表しているが、文の中の “按照步骤（手順通りに）”、“惯犯（常習犯）” という要素を焦点化して強調する “是…的” 分裂構

[5] コピュラ構文の分類および各分類の意味は Declerck（1988）、Patten（2010）を参照されたい。

文としても解釈できる。また、(27) と (28) の“是…的”構文は、“是…的”原因構文の解釈以外に、主語の“群众（民衆)”、“那里（あそこ)”にそれぞれ「変えられない」、「いい生活ができる」という性質を有することを示すコピュラ構文でもある。

本稿では、従来“是…的”原因構文と思われる“是…的”構文は実際に“是…的”分裂構文または“是…的”コピュラ構文であり、原因・理由を表すという構文的意味は構文の固有の意味機能と文脈との相互作用によって生じたものであると考える。

具体的に説明すると、まず、“是…的”原因構文には他の文との因果関係を明示する要素が存在せず、構文自身も直接的に原因・理由を表しているのではない。“是…的”原因構文のみ見れば、(25) と (26) は対比的焦点を示す“是…的”分裂構文、(27) と (28) は単純な“是…的”コピュラ構文に過ぎない。ただし、それぞれの構文には、“是…的”構文の事象が成立すれば、前文の事象も成立するという因果関係がすでに潜在していることも否定できない。例えば、(25) のように、手順通りに作るのが正しい行動であり、成功につながるという一般的な認識があるので、“是…的”構文の表す事象からは自然に「自分の作り方が正しい」という推論になる。“是…的”構文を意味的に類似している一般動詞文に置き換えても、意味的にこの因果関係も成立する。これは (29) で示されている。

(29)　一定是对的、我（都）按照步骤做了。(絶対正しい。私は手順通りに作った（から)。)

問題は、因果関係を示す接続詞などを伴わない際に、どのように２つの文を関係づけ、その因果関係を伝えるかである。“是…的”分裂構文の場合、“是…的”構文は対比的焦点を示す機能によって、他の文が表す事象に関連する要素を焦点化し、２つの文が表す事象を関係づける。例えば、(25) における“是…的”構文は“按照步骤（手順通りに)”という要素を焦点化しており、しかも「手順通りに」ということは前文が表している作製関連の事象に関係するので (「手順通りに」は動作のマナーと考えることができる)、この２文は意味的に結び付けられている。一方、“是…的”コピュラ構文の場合、“是…的”構文はコピュラ構文の意味機能を利用し、前文で言及された物事の性質を補足説明することによって文と文の意味的なつながりを作る（この点については董 (2016) の指摘に同意する)。例えば、(27) の“是…的”構文は前文で言及された“群众（民衆)”の性質を補足しているので、前文と結び付けられている。また、“是…的”構文と関係づけられた文の間に因果関係がすでに存在しているので、結果的に前者は後者の原因・理由を説明することになる。

つまり、“是…的”原因構文の意味機能は原因・理由を直接表すのではなく、分裂構文またはコピュラ構文的な性質によって前文と関係づけることであると言える。(29) が示しているように、中国語では原因を表す接続詞が現れなくても文と文の因果関係が読み取れるが、“是…的”原因構文は前文とのつながりを明示しているので、２文における因果関係をより鮮明に引き出している。また、“是…的”原因構文は原因・理由を表す文に用いられることが多いので、原因・理由を表す構文として固定されたのではないかと考えられる。

4. “是…的” 原因構文の使用上の制約

第３節では、“是…的” 原因構文は “是…的” 分裂構文または “是…的” コピュラ構文と文脈との相互作用から派生した用法であることを分析した。構文文法では、構文は互いに関連しあい、階層化された構文ネットワークを構築する。下位に位置する構文は「継承」という方式で上位構文と文法的情報を共有し、支配されている。“是…的” 原因構文は “是…的” 分裂構文または “是…的” コピュラ構文に由来する以上、上記の２つの構文の統語的・意味的性質も継承していることが想定できる。そして、その使用は継承された上位構文の文法的性質によって制限されていると考える。

まず、3.2においても触れたように、“是…的” 構文における “的” 節には必ず節の述語の主語や目的語、具格要素に相当するものが削除されるという統語的制約が見られる。これはもともと主要部なし関係節の “的” 節の性質であり、分裂構文タイプやコピュラ構文タイプどちらの “是…的” 構文にも継承されてきた。杉村（1999）に挙げられた “是…的” 原因構文が用いられないケースは、構文の表す事象が確定されていないという意味的要因ではなく、統語的な原因によってその使用が拒まれたのである。(6) を再度提示するが、その “的” 節には述語の “送（届く）” の間接目的語（受領者）が削除されている。しかし、間接目的語は “是…的” 構文の “的” 節に削除できる要素ではなく、(30b) は “的” 節の統語的制約に違反したため、非文になってしまったと考えられる。

(30)　a.　……高粱地里传来一阵悉悉嗦嗦的响声。玉环的心里一乐、准是奶奶送饭来了。（…モロコシ畑からこそこそした音が伝わってきた。玉環（人名）はにこっとして、絶対おばあちゃんがご飯を届けてきた（と思った）。）（杉村1999: 57）

　　b. * ……准是奶奶送饭来的。＝（6）

次に、“是…的” 構文の意味機能は別の事象の原因・理由を表せるか否かにかかわっている。(31) と (32) を比較してみよう。同じ “是…的” 原因構文でも原因・理由の説明に用いられる場合もあれば、用いられない場合もある。

(31)　她昨天肯定不在学校、* 她是**昨天**去医院的。（彼女は**昨日**絶対学校にいたわけがない。彼女は昨日病院に行ったんだ。）

(32)　她今天不会去医院的、她是**昨天**去（医院）的。（彼女は今日病院に行かないだろう。彼女は**昨日**（病院に）行ったんだ。）

(31) と (32) における “是…的” 原因構文は “昨天（昨日）” を焦点化した “是…的” 分裂構文である。3.3節で述べたように、“是…的” 分裂構文は他の事象に関する要素を焦点化することによって、その事象と結び付ける。しかも、焦点化された要素は必ず原因・理由の説明に最も重要な要素でなければならない。(31) では学校にいなかった理由を、学校ではなく別の場所にいたという事象で説明しようとしている。ここでポイントとなるのは目的語としての場所の要素であるが、“是…的” 分裂構

文は目的語といった “是” に後接する要素を焦点化できないという制約があるため、場所の要素を原因・理由の説明に重要な要素として際立たせることができず、“是…的” 構文は原因・理由の説明に用いられなくなる。それに対して、(32) のように、“是…的” 分裂構文は「昨日」という時間の要素に注目しており、昨日という時点ですでに病院に行っていたことを強調し、今日行く必要がないということを暗示する。これで今日病院に行かないことの理由になるので、ここでの “是…的” 構文の使用が容認される。

上記の分析は “是…的” 分裂構文の焦点の位置および種類の制約に由来する原因・理由の説明の制約を示したが、“是…的” コピュラ構文の場合は、その構文の意味特徴が使用の制約になることがある。次の例を見てみよう。

(33)　你怎么没开车？（どうして車で来ていないの）＝(8)

a. * ——我的车是坏的。（車が壊れたのだ。）

b.　——我的车坏了。（車が壊れた。）

(34)　a.　他今天没来上课、* 是生病的。（彼は今日学校に来なかった。病気なんだ。）

（董2016: 190）

b. 他今天没来上课、他生病了。（彼は今日学校に来なかった。病気になった。）

(33) と (34) においては、“是…的” 構文は “是…的” 原因構文として前文の表す事象の原因・理由を説明することはできない。代わりに一般動詞文は原因・理由の説明に用いられる。2つの “是…的” 構文はその中の “的” 節が動詞句のみで構成されているので、主語の性質を説明する “是…的” コピュラ構文と判別できる（劉・潘・故2004: 771）。原因・理由を説明できないのは構文の意味特徴を原因としている。

Paris（1998: 148-149）が指摘している通り、“是…的” コピュラ構文は述語の表す事象を個体レベル述語（individual-level predicates）に転換する機能を有すると考えられる。もともと “是…的” 構文の “的” 節における述語の要素は動的事象を表しているが、“是…的” コピュラ構文は時間に関係がなく、恒常的な性質・状態を表している。例えば、(33a) は車に壊れたという性質があることを表しているのみならず、その車が常に壊れており、発話時およびその以前・以降の長い時間に渡って壊れた状態を保っているという意味がある。また、(34a) は彼が生まれつき何らかの病気にかかっていることを表し、日常生活に支障をきたすほどだったというニュアンスも伴っている。しかし、(33) の前提には「車が前に稼働したことがあり、壊れなかったときがある」という意味が潜んでおり、(34) は特に “今天（今日）” という語が存在するので、「昨日までは彼は無事に学校に来ていた」ということを前提としている。したがって、“是…的” コピュラ構文の意味とその前の文の前提となる事象の内容に矛盾が生じたため、両者は共存できなくなる。一方、一般動詞文では、いずれも完了相（perfective）を示す “了” という助詞が現れ、文における人物に関する事象が最近に発生して終了するという意味が生じ、原因・理由の説明に用いられることができる。

5.　結論

本稿は中国語の “是…的” 構文の一種である “是…的” 原因構文の意味形成と使用の制約を分析した。その結果、“是…的” 原因構文は “是…的” 分裂構文または “是…的” コピュラ構文から派生した用法であり、焦点化という “是…的” 分裂構文の機能、あるいは主語の性質を説明する “是…的” コピュラ構文の意味によって、他の事象との因果関係を示し、原因・理由を表すという構文的意味を形成する。また、“是…的” 原因構文は “是…的” 分裂構文または “是…的” コピュラ構文に由来するので、その使用が後者の性質によって制限されている。本稿は主に “的” 節の統語構造、“是…的” 分裂構文における焦点の位置および種類、“是…的” コピュラ構文の意味特徴という３つの性質がどのように “是…的” 原因構文の使用に制限を加えたかを示した。

本稿は構文文法に基づき、特に “是…的” 原因構文と別の構文との関連性（継承関係）に注目している。上記の分析で示されているように、上位構文の文法的性質およびその継承を考慮に入れることによって、先行研究では解明されなかった “是…的” 原因構文の意味形成と使用の制約の問題を明らかにし、構文の関連性が構文研究において重要な役割を果たしていることを改めて示している。

参考文献

郭穎俠 (2003).「“是…的” 構文の焦点と時制の問題」『現代社会文化研究』27, 215-232.

董雪嬌 (2016).「原因を表す “是…的” 構文の用法」『現代社会文化研究』63, 185-195.

楊竹楠 (2020).『分裂構文に関する日中対照研究―構文文法のアプローチから―』博士論文，名古屋大学.

Cheng, Lisa Lai-Shen. (2008). Deconstructing the shi...de construction. The Linguistic Review, 25 (3-4), 235-266.

Declerck, Renaat. (1988). Studies on copular sentences, clefts and pseudo-clefts. Leuven: Leuven University Press.

Kiss, Katalan É. (1998). Identificational focus versus information focus. Language, 74(2), 245-273.

LaPolla, Randy J. (1995). Pragmatic relations and word order in Chinese. In Downing, P & Noonan, M (Eds.), Word Order in Discourse (pp. 299-331). Philadelphia: John Benjamins Publishing.

Li, Kening. (2008). Contrastive focus structure in Mandarin Chinese. In Marjorie K. M. Chan & Hana Kang, (Eds.), Proceedings of the 20th North American Conference on Chinese Linguistics (NACCL-20), Vol. 2 (pp. 759-774). Columbus: The Ohio State University.

Paris, Marie-Claude. (1979). Nominalization in Mandarin Chinese. Paris: Université Paris VII, Département de Recherches Linguistiques.

Paris, Marie-Claude. (1998). Focus operators and types of predication in Mandarin. Cahiers de linguistique-Asie orientale, 27(2), 139-159.

Patten, Amanda. (2010). Cleft Sentences, construction grammar and grammaticalization. Unpublished doctoral dissertation, University of Edinburgh dissertation, Edinburgh.

Paul, Waltraud and Whitman, Whitman. (2008). Shi…de focus clefts in Mandarin Chinese. The Linguistic Review, 25(3-4), 413-451.

Shyu, Shu-ing. (2013). It-clefts in an English text and shi…(de) in its Mandarin translation. In: Tseng, Min-yu (Eds.), Analyzing Language and Discourse as Intercultural and Intracultural Mediation (pp. 109-130). Kauhsiung: The Center for the Humanities, National Sun Yat-sen University.

Xu, Liejiong. (2004). Manifestation of informational focus. Lingua, 114(3), 277- 299.

Zhan, Fangqiong and Sun, Chaofen. (2013). A copula analysis of shì in the Chinese cleft construction. Language and Linguistics, 14(4), 755-789.

李訥・安珊笛・張伯江 (1998).「从话语角度论证语气词 “的”」『中国语文』2, 93-102.

劉月華・潘文娛・故韡 (2004).『现代汉语实用语法（增订本）』北京 : 商务印书馆.

森友佳 (2011).「“（是）VP 的” 结构中 “是” 与 “的” 的词性及语法意义」『ことばの科学』24, 101-118.

杉村博文 (1999).「“的” 字结构、承指与分类」江蓝生・侯精一（編）『汉语现状与历史的研究』北京 : 中国社会科学出版社, pp. 47-66.

屠愛萍 (2013).「语言的隐显形式与 “是……的” 句的再分类」『语文研究』4, 30-37.

王文颖 (2018).「“是……的” 句的两种焦点结构」『语言教学与研究』5, 43-54.

謝成名 (2012).「从预设看两种类型的 “（是）……的” 句及其时体特征」『世界汉语教学』4, 478-494

朱德熙 (1978).「“的” 字结构和判断句」『中国语文』1,23-27. 2, 104-109.

朱德熙 (1982).『语法讲义』北京 : 商务印书馆.（杉村博文・木村英樹訳 (1995)『文法講義 : 朱德熙教授の中国語文法要説』東京 : 白帝社.）

出典

BCC 语料库（BCC, BCC コーパス）http://bcc.blcu.edu.cn/（2021年9月20日閲覧可能）

CCL 语料库检索系统（网络版）（CCL, CCL コーパス検索システム（オンライン版）
http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/（2021年1月2日閲覧可能）

（劉　陽、東北大学大学院国際文化研究科応用言語研究講座）